令和４年度（2022 年度）学校評価報告書

園名	宝塚市立　　安　倉　　幼稚園	園長名	吉田　ゆかり

1 学校教育目標

【教育目標】心身ともにたくましい幼児の育成
【研究主題】　「やる気・本気・根気　あきらめない心を培う保育実践」
～幼児が心と体を弾ませるための環境構成の工夫～

2 重点目標

○　安全・安心な生活の中で、幼児の体験を豊かに広げ、保育の充実をめざす
○　家庭・地域と共に育ち合う幼稚園づくりをめざす
○　幼児の育ちを支える心豊かな教師集団づくりを進め、教師の資質向上をめざす

3 学校自己評価結果（A：優れている　B：良い　C：おおむね良好　D：要改善）

領域	評価の観点及び評価項目		達成状況	学校の取組状況・改善の方策	4 評価項目ごとの学校関係者評価
学校運営	開かれた幼稚園づくり	○　家庭や地域へ園の取組や幼児の様子について情報発信を行う。	B	ホームページでの地域への情報発信や園内での写真掲示と合わせて、コドモンシステムによるドキュメンテーションも家庭への情報発信ツールとして加わったので、それらを生かして子どもたちの様子を知らせていけるようにしたい。誰を対象に何について発信していくかそれぞれのツールのよさを生かして使い分けられるようにしたい。	様々な方法で、幼稚園の取り組みを伝えていくことは大切である。幼稚園に関心をもってもらい、安倉幼稚園のよさを多くの方に知ってもらえるようにしてもらいたい。
		○　幼児の体験が豊かに広がるように地域のよさに気付かせたり、取り入れたりしながら保育を進める。	A	地域の方の畑を借りての栽培や、老人クラブの方との交流など、地域の方に親しみや感謝の気持ちを感じられるよう努めた。安倉音頭、太鼓は継続して積極的に保育に取り入れて取り組むことができた。また、遠足で近隣小学校や地域の公園を利用する等、自分たちの地域を知る機会とすることができた。	継続して取り組んでいるのがよい。地域の方とのつながりを大事にし、地域を愛する心、自分を大事にする心を育ててほしい。地域を大事にする心は、相手を大事にすることにつながるので、今後も継続してほしい。
	子育て支援の推進	○　幼児の成長を中心に据え、親と子の育ちの場としての役割を果たす。	B	懇談などで個々の育ちや頑張りを伝えたり、保護者向けの話で幼児が興味をもっている遊びの楽しさや意味を伝えたりして、幼児の育ちや学びを共に感じてもらえるように努めた。また登降園の際も、保護者に声を掛け、子育ての悩みなど話しやすい雰囲気づくりに努めた。	家庭の状況も様々で、保護者の置かれている状況も多様になっているが、子どもの育ちを共に喜び合う機会を継続してもち、引き続き子育ての支えをしてほしい。
		○　未就園児親子の居場所づくりや支援を行うため定期的に保育の場を提供する。	B	未就園児教室を定期的に実施することで、入園前の幼児や保護者が園に親しみを感じられるようにした。また、参加している保護者に声をかけ、話をしやすい雰囲気づくりなどに努めた。	他の親子とつながりをもちにくい親子もいると思われるので、未就園児教室を通して、少しでもつながりをもてるとよい。今後も未就園児教室への参加を呼び掛けてほしい。
	危機管理体制の整備	○　危機管理マニュアルにそった定期的な訓練、安全対策を行う。	B	様々な想定で定期的に訓練を行うことで、職員間の連携や動き、幼児を安全に避難させるための誘導など点検確認し見直す機会をもつことができた。また、遠足や場所移動など、人数確認の徹底など職員間で意識して取り組んだ。	子どもの安全を守ることは第一に考えないといけないことである。毎年定期的に、先生たちが目標をもって、訓練をしていくことは大切である。
	教職員の資質向上	○　教師間で、幼児の育ちや環境構成等について話し合う機会をもつと共に、研修での学びを通して幼児理解に努める。	B	日々の幼児の様子を伝え合い担任以外の職員も気付いた時に話題にするなど、幼児の様子や育ちについて職員間で共通にすることで、一人一人の幼児理解を進めることができた。支援が必要な幼児についても、研修での気付きや学びを生かし職員全体でサポートしていけるように、情報共有をした。	幼稚園の先生たちが、みんな同じように自分の子どものことを知ってくれているというのは、とても安心感につながる。子どもを任せられるという気持ちにつながるので、ぜひ今後も情報共有に努めてほしい。

		○　幼小接続を意識しながら、主体的に粘り強く取り組む幼児の育ちに向けて保育を工夫する。	B	小学校と連携をすることで、就学後の具体的な姿を見通して、保育を進めた。その際、あきらめずに取り組む気持ちを育むことができるように、挑戦したり友達と一緒に頑張ったりできるような保育内容を工夫した。特に 1 年生の先生との協力体制がとれ、行事を通した幼児・児童の交流をし、互いの実態の理解を図ることができた。	学校とのつながりがあるというのは、大切である。以前と比べて、ずいぶん学校との交流が増えていると感じた。先生同士のつながりを今後も大事にして、交流を続けてほしい。
教育課程	幼児期にふさわしい生活の展開	○　幼児の興味や関心を把握し、幼児の思いに沿いながら、主体的に根気強く取り組めるような保育内容を工夫する。	B	保育の中で個々の興味関心を生かして好きな遊びの展開をしつつ、友達と一緒に遊ぶ楽しさが感じられるようにした。その他にも興味が向く幼児の思いも生かされるように、遊びの内容や行事のもち方を検討した。	先生が環境をつくるということがあるとは思うが、子どもたちがやりたいことを中心に考えて、遊びを進めているのがよい。
		○　幼児が自ら体を動かしたくなるような環境を工夫し、自分なりの目当てをもって取り組むことができるよう支える。	B	チャレンジタイムや好きな遊びの中にルールのある遊びを取り入れるなど体を動かして遊ぶ楽しさが感じられる遊びを意識して取り入れた。体を動かす遊びでは、幼児が自分の目標をもって意欲的に取り組めるよう支えてきた。また、3 学期になり、5 歳児の様子を見ていた 4 歳児が竹馬に取り組もうとする姿があったので、年長組に向けての意欲を支えるようにした。	少し難しいことを、繰り返し取り組んで頑張ろうとする気持ちを育てていると感じる。竹馬の取り組みなど、個人の製作ではなくなっているが、取り組みとして続いているのがよい。年長へのあこがれももてるようになると感じる。
	基本的生活習慣及び道徳性の芽生えの育成	○　日々の生活を通して、基本的生活習慣を育成すると共に、互いの違いやよさに気付き認め合える仲間づくりを進める。 ○　葛藤やトラブルを乗り越える体験ができる場や機会を逃さず、あきらめない心の育成に努める。	B	日々の生活の中で、幼児が互いのよいところや頑張っているところを見付けられるように意識して進めた。また、トラブルになった時に、それぞれの話を丁寧に聞き、納得して気持ちの折り合いがつけられるように支えた。その時の状況により、自分の気持ちが抑えられなくなる幼児もいるので、引き続き気持ちを落ち着けて考えられるように援助が必要である。	集団の中で、トラブルも日々あると思うが、子どもが納得できたかどうかが重要である。時間がなかなか取れないこともあると思うが、子どもたちの気持ちを聞き、互いの気持ちを伝え合えるように、今後も丁寧にかかわってほしい。
	校種間連携	○　保・幼・小・中・養護学校と子どもの育ちについて共通理解する場をもつ。 ○　近隣の就学前施設とつながりをもち、入学後の子どもの姿などを通して小学校と意見交流を行い共に育てる意識をもつ。	A	継続して取り組んでいるプレ 1 年生やトライやるウィーク、ブロック別研修会などで子どもたちの様子を知ったり交流したりする機会がもてた。1 年生の先生と近隣の就学前施設が一緒に進学した子どもの学校での様子を聞くことができたので、同じ地域の子どもたちを育てるという意識をもって取り組むことができた。	学校に向けて、安倉地域の幼稚園、保育所、保育園がつながりがもてることが素晴らしい。同じ学校に行く子ども同士のつながりがもてるように、また、先生同士もつながっていけるように、今後も取り組んでほしい。
課題教育	人権教育	○　幼児期の特性を踏まえ体験を通して幼児期にふさわしい人権意識の育成に努める。	A	LGBT に視点を当て研修をした。子どもたちが互いの思いや考えの違いを知ったり受け入れたりできるような人権意識が大切であることを学んだ。保護者にも子どもたちと同じ絵本教材を使って話す機会をもった。継続した取組が必要である。	子どもたちに絵本を教材として取り入れたものを、保護者にも知ってもらえるようにしたことがよい。幼児期なので特に、同じ絵本を通して、家庭でも話題にしていくことが大事である。
	特別支援教育	○　幼児一人一人の課題を明確にし、教職員全員で共通理解を図り、幼児の実態を踏まえた指導を工夫する。	B	学級の中での支えはもちろん、園全体で課題やかかわりで何を大切にしたらよいか、共通理解し取り組むことができた。園内研や、職員間の話し合いで、個々に合った支援や学級の中での環境を考え取り組んだ。	様々な支援を要する子どもがいるので、その子どもに合った手助けを職員みんなが知っていることで安心できる。みんなで育てるという保育を継続してほしい。

	防災教育	○　様々な事態を想定した避難訓練等に取り組む機会を通し、教師の防災教育に係る指導力・実践力の向上に努める。	B	様々な想定の訓練を行い、その都度幼児自身も命を守る大切さに気付けるように進めた。今年度は学校と連携を取り、水害の避難訓練も実施し、それぞれの災害による避難方法の違いを学ぶ機会となった。		隣接の学校と連携が取れるのは、災害時にとても心強い。繰り返し訓練することで、状況による避難の仕方の違いを子どもたちも身に着けていくと感じる。

5　学校評価の実施方法についての学校関係者評価

保護者の参加が有った行事ごとに、アンケートを取り保護者の思いや願いを把握しているので、評価の実施方法として適当である。

6　総合的な学校関係者評価

園の職員が、みんなで子どもたちのことを分かり、子どもを中心として取り組んでいるのがよい。今後も地域を愛する子どもたちを育ててほしい。